

## 基調講演



Photo  
大河内 禎

### 「今、街はたのしいか？」

北山孝雄氏（プロデューサー 株式会社北山創造研究所 代表）

皆さん、こんにちは。今、ご紹介に預かりました北山でございます。

『街はたのしいか』ということで三枚メモがございます。このメモは何を意味しているのかといえますと、1枚目は世の中がどのように変化したなあ、というようなことを列挙しております。2枚目は、私がいろんなまちを訪れた折に非常に印象に残ったまちを楽しくする施設の写真です。3枚目にはワークスと書いてありますが、これは約40年間ほど仕事をしてきて印象に残る仕事を列挙しております。では、この三枚のメモと私の話とを併せてお聞きいただけたらと思います。

まず最初に、「プロデュース」とはどんなものなのか、私なりの説明させてください。

日常の暮らしの中で、住みたい場所、遊びたい場所、そして働きたい場所、そして暮らしを楽しむために様々な施設や様々な商品があると思いますが、私はまず、こういうものがほしいなというものを発想します。自分たちのアイデアがあって、そのアイデアを具体化するためのチームを集めます。そして、それを具体化するために必要な資金を集めます。これは企業に頼ることがあったり、公共にお願いすることがあったりします。このように、はじめにアイデアを出して、スタッフの構成をつくる。そして、予算を編成して、時間を組んで、はじめの志を具体化する仕事を「プロデュース」と呼んでおります。そういうような形で具体化したものが、三枚目のメモにワークスという仕事集であります。

街を考えるときに、特に戦後60年を多少振り返ってみる必要があると思うんですね。私の生活実感でいきますと、20歳頃には、ものがなかったんです。街並みも全然でしたし、こういうようなところで働きたいというような働く場所もございませんでしたし、ファッションにしる、工業製品にしる、いろんなものが不足をしていたんです。昭和30年頃は、洗濯機・テレビ・冷蔵庫といったものが三種の神器と言われていたんです。その頃は、東大を出て大企業に入って偉い人になるか、役所に入って次官になるか、というような価値観があったように思うんです。いつかは田園調布に大きな家を持って、クラウンに乗ってというような夢をもった時代でありますし、優秀な大学を出れば終身雇用、年功序列で、土地がマンションを買っておけば、自然

にそれが上がるという神話がありましたし、そういう価値観で私たちの世代は生きてきました。常に「もの」中心で来たんです。『こういうものがほしい』『こんな家に住みたい』昭和30年頃から高度成長になりましたから、とりあえず働いてそれを獲得しようとしてずっとやってきたわけです。『Big is better』という言葉や『いつかはクラウン』という広告が昭和40年くらい前はあったんですね。そういうような時代をずっと経て来たんです。経済成長して、合理的に物をつくっていかねばいけないということで、やはり東京が中心になりまして、国も補助をどんどん出していったわけです。そして、例えば空港にしても、駅にしても同じ物をどんどんつくって来たんです。戦後40年間特にそうです。飛行場でも、東京から出張で徳島に降りる、岡山に降りる、そして熊本に降りる。どこに降りても熊本なのか徳島なのか確かめないとわからないくらい同じ風景です。あらゆるものが合理的で画一的にどんどん生産してきたわけです。そういうような中で、私たちは、自分たちがほしいものを、提案してきました。自分たちがほしいものは、世の中の人たちも同じようにほしいだろうと考えました。35年ほど前に青山で計画したオフィス兼商業施設の建物で、敷地は500坪くらいで2000坪くらいの床面積のビルがあります。この建物は、非常に時代を反映しております。35年位前にマンションメーカーと呼ばれていた小規模なアパレルメーカーがありまして、そういう人たちは24時間働くくらい忙しく、一般的な丸の内のビルには入れませんので、マンションをオフィスに代用して使っていたんですね。そういうようなニーズがあったものですから、東京は24時間都市になって、自由業の人が非常に多くなるだろうと、そしてさらにグローバル化していくのではないかと、私たちが勝手に予見したわけです。24時間使える、自由業の人たちが集まれるようなオフィスビルをつくらうということでフロムファーストというビルを計画させてもらったんです。

これをつくるときに、やはり一つの施設ってというのは連なっていくんですね。前後一キロくらいの街で、こうなってほしいという思いをつくったんです。今、1階は全部ファッションブティックになってる街になりました。私たちはそうやってほしいなと思ってつくったのです。この時に、もったいないと思ったことがたくさんあります。東京の街の航空写真を見ると、屋上は全く使われていないんですね。一番建物の中でビューのいい、見晴らしのいい場所をただ室外機が置いてあるような場所にしておいていいのか。むしろ、そこがビルとしては収入の得られる場所ではないかと屋上の利用というのを考えたんです。この建物は、5階は全部屋上から入るようにしています。非常階段は法的に必要なので、じゃあ、その非常階段をメイン階段のような美しい階段にしたら非常階段という変な無骨なものをつくらなくてもいいのではないかと思い、美しい階段にしました。そういう意味で、この建物は自分たちにとってもそうですし、そして建築に携わる人たちにとっても非常に重要な役割を果たしたんじゃないかなと思うのです。30年経ちまして、未だに入居希望者が後をたたないというビルなんです。このビル一つとっても、戦後の不動産神話が語れま

す。当時、私は30歳くらいでしたが、『土地を買ってこい』とある企業に言われまして、ずっと青山・赤坂・六本木と探したんですが、大体坪当たりにして90万円から110万円なんです。1990年に国の発表した日本全国の土地の値段が2400兆円というくらい膨大なものになった時代には、この土地も坪当たり110万円が一億円になったんですね。5億5000万円で買った土地が500億円に変化したわけですね。そして1995年くらいには、また800万円くらいに減りまして、今また坪当たりの値段が3000万円くらいに変化しているんですね。これを見ても、土地は1990年くらいで終わっていて、あとは非常に価値のあるものだけ値段が上がるというようなことが言えるのかなと思うんですね。だから、街を考えるときに、やはり『もったいないな』『これは無駄だな』と思う様なことをどうしたらやめられるか。その街しかないものはたくさんあるんだろうと思います。

そういうように考えながら、まちづくりの仕事のお手伝いをしています。今日も小山市の市内をずっと散策・視察させて頂いたので、駅前商店街は、ほとんど人がおいでにならないんですね。私どもは、非常に実践的に体験的に具体的に仕事をしています。中心市街地を活性化するのにどうしたらいいのかという質問はほんとに多いんです。この前も経済産業省のトップの方から、地方のシャッター街をどう考える？と聞かれました。私は東京の西麻布というところで34年間仕事をしています。同じ場所で仕事をしているものですから、街の変遷がよくわかります。六本木ヒルズがすぐ200mくらいのところにあります。東京の一番の中心地です。その中心地の西麻布から広尾まで私は毎日歩いて通っているんですけど、西麻布から広尾まで歩く間に6店舗ほどずっと一年間も空いたままなんです。日本の中でも一番一等地という場所でもそれだけ空いているんです。そんな時代なんです。地方の商店街の昭和50年ぐらいいものを置いとけば売れた時代とは全く違うんです。並のことで、人が集まってそこで物を買うということはないんです。あらゆるものが戦後非常に効率よく合理的につくる仕組みをつくったんです。日本は、それはそれで成功したと思うんですが、25年くらい前から、自動車にしろテレビにしろ洋服にしろ洋服なんかは特にそうですけど、ファッション類なんかは家の中のたんすに溢れていっぱいと言われるようになりました。どんどんどんどんつくる訳ですからどんどん余る訳です。東京で年間約8万件くらい住居がつくられていくんです。これは毎年毎年増えていくんですね。ただ人口が増える訳ではないんです。ということは、古い建物は捨てられていくということなんです。で、そういうふうなことを東京の港区というところで実体験として感じながらよくよく考えてみると、やはり35年位前に、ニューヨークのSOHOとかブルックリンだとかそういうところは街ごと捨てられていたんです。今、ニューヨークのソーホーはアーティストが住みついたもんですから画廊できて、カフェができて、レストランができて、非常にいい文化エリアにはなっています。それでもここ10年くらいなんです。35年位前はホームレスの人たちしか住まないような場所でした。

た。だから物がどんどんどんどん増え続けるということは余るということなんです。余れば捨てられるのです。この前もベルギーのアントワープという街に行ったのですが、300m四方くらいのエリアは、ファッションエリアになっていて活況を呈しているんですが、一つブロックを離れると全く人もいない、オフィスにも使われていないし、住居にもなっていないのがずっとつながって続いているんです。使わない若しくは使えないようなものは捨てていくということなんです。



一ヶ月くらい前、越後湯沢の投資用マンションが、2800万円だったものを300万円で誰か買わないかという話を聞きました。ぼくは冗談でしょうと言っていたんです。というのも300万円というのは非常に高額だと思うんです。10年間持っていなければならぬかという条件が付けば、300万円であっても、買う人は考えるだろうと思います。そういうような時代を私は経てきているんです。1985年位には、日本は金融立国になるからオフィスが足りない、土地が足りない、東京湾を埋め立てようと本気で考えていたんです。ですから、アクアラインのあたりまで東京湾全部を埋めて、オフィスと住宅にしなければならぬ、足りないといっていたんです。友人の一人はそんな時間がかかるから大きな船、10万トンくらいの船を持ってきて、東京湾に浮かべてオフィスにしよう友達からお金を募って新聞発表した人もいました。

そういうような時代を経てくる中で、私は日本の暮らし、日本の楽しみ方、働き方が手本になるんじゃないかなと思ってきたんです。ワークスのこの二枚目をちょっと映してください。これは、こたつライフスタイルという、約30年位前に提案したものです。日本には、こたつの中に4人が座って家族団欒があって、これが一つあるだけで家族仲がよくなると私は考えていたんです。社員がこたつライフを提案しようということになりました。赤い天板のトップがあったり、グリーンのマージャン台みたいなものをちょっとおしゃれにして、パッチワークの布地を置いてあるだけなんです。これは一年目はそれほど売れなかったんですけど、二年目からはほとんどの大手がこたつライフスタイルというものを百貨店の売り場に並べたくらいヒット商品になったんです。30数年たった今、世の中は先端技術が発達してIT化されて、みんながパソコンをもっている時代になって、なかなか人と人が触れ合って話をするという場面が非常に少なくなりました。そういう側面からいいま

すと、こういう日本の伝統的な暮らしの中に、人の仲がよくなる道具があるのではないかなと思うんです。だから家一つとっても、家族全員が仲良くなる構造と、家族全員がばらばらになる家とあるんです。たとえば、玄関に入ってすぐリビングがあってそこを通らなくては自分の部屋にいけないとしたら、言葉を交わさなくても存在とつながりがあるんです。そういう家は家族仲が悪くなるのが少ないんです、絶対とはいえませんが。だからこういったようなこたつのライフスタイルでも家族仲がよくなるように、これを大きく街として考えてみたらどうかと思うんです。今のようにパソコンがどんどん進んでいって IT 化されていって、テレビゲームなど家の中で自分ひとりのできるようなことが多くなると、人と集うチャンスがすごく少なくなるんです。そういった意味で、どうにかして人が集うところをたくさんつくっていかなくては、街中で人と人が仲良くなれないと思う訳です。私はどうしたら人と人が仲良くなるんだろうか、どうしたら暮らしが楽しくなるんだろうかとずっとやってきました。もう一つは扇風機です。これも例えば戦後非常に効率よく、便利で均質に同じような暮らしをしようということで、冬は暖房夏は冷房でした。そうじゃなくてなくて、これは一応、団扇とか扇子とかおんなじ様なものなんですね。団扇とか扇子とか見てて日本人ってセンスあるなと思って、その延長線上で作りました。



次に、これは、東京の渋谷につくったライブホールなんです。ライブホールが最終目的ではありませんで、渋谷の文化村から道玄坂に抜ける道なんです。約400mくらいありまして、まわりに150件くらいラブホテルがあります。ラブホテルが悪いってわけじゃないんですが、ラブホテルに行くような人しか歩けないような道は不自然だから1回の公演に1000人くらい集まるようなホールをつくってみたら街は変わるかもしれないというので、ON AIR というライブコンサートをするホールをつくったんです。120坪くらいの土地に1,000人入るんですね、1,000人入って2時間から3時間踊るといようなもので



渋谷 ON AIR / 1991

す。こういうものを造ったおかげで、街っていうものが、どんどん変わってきたんです。一般の人も歩けるようになりました。



「函館西波止場 / 1994」

これは函館なんですけど、最初左大きな5階建ての建物がありまして、これを利用して街の人たちが楽しむような施設を造れというのが、行政とこれを保有している人からの私に対する注文でした。私は街の一番重要な場所にゴミ箱があるのはおかしいと思いました。ゴミ箱といわれて所有者は、はじめは怒っていたんですが、よくよく考えてみたら、ほんまにゴミ箱みたいねっていうことになりまして、直そうと。ただ2階建ての建物をつくったというわけではございません。1階2階にですね、約900坪の広場があるんですね。この広場は、夕日がよく見えるものですから、日常周辺の人たちがぶらっと立ち寄れる、そして何もお金を使わなくても楽しい広場って言うものを造ったんです。3億円くらいでできてるんですが、毎年12億円くらい商いが行えるんです。私は大阪で生まれて大阪で育ったもんですから、施設をつくるとしたら必ず事業にならなきゃいけないんだという認識を持って仕事をしてきています。いつも売り上げのことが頭の中にあります。ものを買う人、その施設を利用する人、その施設を賃貸する人がいないと施設って言うのは、非常に陳腐化して廃屋になっていくんです。そういう意味で商売になっていないといけないと思うわけです。この場所はテレビのドラマとか映画とかで函館をやるとたいがい映る場所なんですよ。

40年くらい前に赤坂にムゲンというディスコをつくるお手伝いをしたんです。そのころから、やはり名所づくりっていうのをやりたいな。30年くらい経ったあとに自分が作った、仕事を手伝わせてもらったところをはとパスがずっと廻ってくれたら幸運だなと思って、25歳くらいのときから名所づくりを頭の中に思い描くようになったわけです。これも函館の名所になっているんです。そういうようなことで、名所や名物をつくりたいというようなことをずっと考えながらやっております。



「徳島東船場ポートウオーク / 1996」

次、1996年の徳島ポートウオークをお願いします。

これは、徳島に東新町商店街というのがありまして、150件くらいの商店主がいる商店街なんです。約15年前くらいに、商店街活性化ということで仕事を頼まれました。徳島の駅からすぐのところなんですが、商店街の人と話をしたら色々思惑があり、色々食い違っていて統一が取れませんので、これはなんにもできないなと。例えば、アーケードの天井を変えとか、サインボードを変えとか、歩くところを変えとか全国で同じようなことをやってる訳ですから、そんなことをやってもつまらないなと思っていた矢先に、東新町商店街から約150mくらいのところに川があったんです。川沿いの道は徳島県が駐車場にしていました。この川を、パリのセーヌ川のように川沿いを歩けるようにしたら、そこに人が集って、そして川もきれいになると考えました。これは女性も男性もそうなんです。川も見られると、さらにきれいになるんですね。そういうことで新町川を散策する400mをつくらうという提案をしたんです。たいそうな模型をつくって徳島までもっていったところ、東新町川を守る会というのがありまして、川に捨てられた汚物とかを拾うボランティアを20年続けている中村さんという方がおられまして、大賛成してくれました。役所っていうのは1回行っただけじゃダメだから、俺が100回行ってでもなんとかしよう、賛同者が出てまいりまして、そして市や県に行ってくれたんです。私も当時の通産省だとか建設省だとかにお願いに行ったりしました。ここでは土日にパラソルショップというのをやってるんです。1回パラソルを借りる費用は一日2500円、50パラソルくらいです。これには結構2万人くらいのおいでになるんですよ。ちなみに徳島は27万人弱の都市なんです。こんなものつくっても人は来ないだろうと東新町の人に言われました。19時になったらこんなとこに人がいないんだと商店街の人はおっしゃるんですけど、商店街の方もそこに住んでいないのです。だから街っていうのは住んでいるっていうのが一番重要なんです。人が住んでいて、お店があると。お店がない場合は、またそれが住居になっている。だからぼくは商店街という名前が古いと思うんですよ。生活街という名前に変えた方がいいと思うんですよ。だから商店街の中にお風呂屋さんがあってもいいし、商店街の中にそのまま1、2階が住居になっていてもいいと思うんです。必ずそこに住んでいることが大切だと思う

んです。1985年くらいに東京というのは土地が足りない、東京湾を埋めようといってるときに、巨大な開発が幕張で行なわれました。ここは今は、夜中の7時ごろになると、泥棒でもいいので横におってっていうくらい人のいない怖いものになっているんです。だから街に人がいるってことが非常に重要だと。街に住んでいるということが非常に重要だと、これをつくったときにも思いました。川とか海とか言うものを日本の戦後は捨ててきたんです。自動車を主役にするとともに、川は全部裏道にしまったんです。これは東京の日本橋の上に醜い高速道路が通っているのを見ても非常に明らかなと思うんです。川の上に高速道路が通っているのは非常に多いんです。ボードウオークができると、川に今まで背を向けてきた家が、店も川の方に向けてできてくるんです。今現在、約10年くらい経っておりますけど、ほとんど川の方に向けては店になっております。ここで重要なのは、その街にしかもっていない資産というものがあるということ。国とて同じだと思うんです。先ほどいいましたようにIT化されて、日本というのは、皆さんご存知のように高齢化しております。IT化されてきた関係上、非常にグローバル化も早くなったんだと思います。そうなればなるほど、その街にしかないものというのに価値が出てくる訳です。それが「個性」なんです。その街の個性、資産というものが何かということ、見つけ出すことこそ『街はたのしいか』というものをさらに楽しい街にするための一番重要なものだろうと思うんです。川は、街のスターみたいなものなんです。例えば、野球の選手で言えば、イチロー一人いるだけで野球というものが賑わったと思うんです。だから、なにかひとつ街が持つ資産を大切にしてみんなで育てると、その街が栄えるだろうと思います。実際そういうようになっております。戦後の価値観とはもの中心だったんです。「いつかはクラウン」というようにね。でも今のCMは、「ものより思い出」って言っているんです。だから、もういっぺんそこでしっかり考え直して、街はたのしい、街をどうつくるかというのを考えていくといいなと思うんです。ボードウオークは2億円でできているんですが、最初はなかなか説得できませんでした。地元の人もそんなもんつくっても人が来ないよって言う人もたくさんおられました。商店街の人たちに私は「夜、若い人たち(中高生たち)も街に出たいと思うよ。いっぺん、夜7時から12時までナイトバーゲンってものをやって見て下さいよ」という提案をしたんです。大体ご主人が動かないでおかみさんが働くんです。で、おかみさんたちがじゃあナイトバーゲンやろうと7月に10年ほど前でですけどやったんですよ。やってみたらこれが2万3000人くらいのおいでになるんです。やっぱりなんかあったら人が来るんだということがお分かり頂いたんです。じゃあ冬は何しようということになり、ナイト屋台をやりました。やきそばとかラーメンとかオムライスとか作るナイト屋台です。これも2万3000人くらいのおいでになるんですよ。私のヒントの発端は、自動車事故があったらみんな見に行くでしょ。それがナイト屋台であったりナイトバーゲンであったりするんです。そのように何かやはり今までにない変化を起こす必要があるだろうと思

います。これからの時代、日本の経済が全部駄目になるとは思いませんけれども、やはりまだまだ無駄が多いし、もったいないことが多いと思うんです。これだけ IT 化していますから、世界に羽ばたいてグローバル化して、すごいお金持ちになる人はいると思うんです。だけど、私たちの経験で、お金持ちになったからといって、それが豊かかという、どうもそうではないかな。たとえば金融のビジネス、ナノテクノロジー、バイオテクノロジーに代表されるような先端技術、情報とか通信の技術で世界にビジネスをしていくという一部の人はあっていいと思うんです。ソフトバンクの孫さんなんかはそれで 100 兆ぐらい GDP をあげれば、今の 500 兆円が 600 兆円になるじゃないか。そうでもない日本の国は死んでしまうというような人もおられますが、一方で非常に身の丈にあった、そしてこれからの時代の価値観で生きていかなければいけない人が多いと思うんです。そのときにじゃあ街っていうものは、何なのかということをお問わないといけないだろうと、私は思います。

次に 1997 年にオープンした亀戸サンストリートです。



「亀戸サンストリート / 1997」

これは、左の上に超高層の建物がござりますが、その超高層の建物は 1985 年に、東京都都市計画審議会を通過していたのですが、私の友人がこの企業のオーナーで、『北山どう思う？』って聞かれました。2、3日してからお会いしまして、これは御社の巨大な墓石になるよって話をしたんです。何故、墓石になるかという、それはすごく簡単で、この事業プランを見ると、東京の亀戸という青山・赤坂から 15km というところで、賃貸が 5 万円という机上の計算なんです。青山でも 1985 年ごろは 1 万 5 千円ぐらいの家賃でオフィスが借りられたわけですから、どんなに高くても亀戸では 1 万 5 千円だろうと計算していくと、20 年で 2000 億円ぐらいマイナスになるんです。これは大変なことだとオーナーに伝えました。自分のお金だから考えられたんです。日本の 1945 年頃から 1985 年頃までは会社のお金と自分のお金をうまく使い分けてきたんです。こういうような、これをやめようという決断ができるのはオーナーじゃないとできないんです。このオーナーも、自分の会社で作った建物が自分たちの墓石になっては大変だといって、これはやめたんです。そのあと、じゃあどうするかって話になったわけです。約 8000 坪ぐらいの敷地があります。東京にいとポケットにお金がないとどこにも行け

ないんです。これがパリとかロンドンだったら、ぶらっといったら公園があったりベンチがあって、寒かったら別ですけど暖かかったら一日お金を使わなくてもいられるんです。私は、東京の上野毛に住んでるんですが、横浜まで車で家族 4 人で行ったら必ず 2 万円くらいなくなるんです。別に何をしたわけでもなく 2 万円なくなるんですね。すごい不愉快なんです。ポケットにお金をつっこまないでぶらぶら歩いてたのしい街が、これからの時代、特に豊かな街なんだろうと思う訳です。この亀戸は日本一の高度密集地で、5km で円を描くと 115 万人の居住者がいる街なんです。そして、中高層のマンションが多いんです。だから 5、6 階に住んでいる 70 歳以上の高齢者の方は、ほとんど家から出ないんです。テレビ見たままなんです。出て行くところがないって言うことが非常に多いんです。私はそういう人たちが、2000 人でも 3000 人でもベンチに座っていただく。お金使わなくてもそこに座っていたら 30 年来の友達に会える場所を作りたいかったんです。この広場は約 350 坪くらいありまして、3000 人くらいは入れるんです。その後ろにずっと 300m くらいの道がありました。そこは自転車も入ってきませんし、もちろん自動車も入ってこないんです。そういう道を作ったんです。私は、犬も連れて歩けるし、子供の手は離せる。大きな駐車場に行きますと、駐車場ではどの車が動き出すかわかりませんので、常に子供の手を握ってなくてはいけません。緊張する訳ですね。だったらその 300m ほどの道を、自転車が入ってこない、車が入って来ない道を作りたい。そして、お金を使わなくても楽しい場所。そのためには事件が起こってなくてはいけません。この広場では、500 事件起こっているんです。英語の学校のセールスとか、ガーデニングのセールスとか、中古車を売るとか、新車の展示会とか、500 回年間行ってるんです。それを楽しみに、おいでになる訳です。そうはいいいながら、人がおいでになると大体 1000 円とか 2000 円はお金を使われるんですよ。だから 5000 坪ぐらいの売り場で、年々ちょっとずつ売り上げが増えていくんです。今 200 億円売っているんです。大変なヒット商品です。取り敢えず街にこういうものがあると楽しい。さきほど、思川を自動車で渡らせてもらったんですけども、歩く道がないんです。驚愕しますよね。人が歩かないの？みたいな。みんな車で移動するのということになるんですね。やはり、人道橋。これは世界中で検討しているんです。それか、自動車道の上に木造の橋でも作ってもらってですね、眺望を・・・日光連山ですか・・・見ながら歩いていくような橋をつくる。



「日光連山と思川」

私の二枚目にあるんですけど、たとえば錦帯橋というのが岩国にあるんですが、この橋、大体 15 億円くらいできるとのことです。この橋一つで岩国の街は有名なんです。こういうような、名物になるようなものを一個くらいもってほしいなあと思います。



「岩国 錦帯橋」

駅の向こう側に商業施設がずっとありましたけど、あれはある意味楽しいだろうなと思うんです。でも家族で行くと、子供は CD 屋に行きたい。お母さんは 100 円ショップに行きたい。おやじさんは、オートバックスみたいなカー用品のどこに行きたい、としたらどうするのかと思うんです。ひとつずつのブロックが大きいですから、一箇所で降りたら、子供の CD ショップ 付き合っ、お母さんの 100 円ショップ 付き合っ、親父さんのオートバックスに行くという、みんないやいや付き合うというしくみなんです。これはビジネスとしても古いと思うんですよ。だったら、ずっと歩く大通りが中心にあって、そして後ろに全部車が止まっていて、施設がつながってできていないといけな。一見今までの商業施設の街のつくり方っていうのは効率よく見えるんですが、実は非常に効率の悪いものだと思うんです。たとえば歩くところで思い出したんですけど、アメリカにロサンゼルスという街がありますけど、これは自動車が出てからできた街なんで、なんでも自動車を使わなければならない、コミュニケーションが悪すぎるのです。コミュニケーションというのは人としゃべるといってではなくて、人と人とが触れ合う、なにもしゃべらなくてもコミュニケーションなんですよ。そういう場所がなさすぎるということで、サードストリートという通りを作ったんです。



「LA サードストリート」

この LA サードストリートというのは、1.3km くらい車が入らない歩道なんです。これはロサンゼルスの中でも

好評なんです。戦後合理的に効率よくものをつくる、そして街もそうしてつくってきたんですが、成熟した社会になって、グローバル化されてきて、そして高齢者の多い時代になったということは、今までの価値観とは違う価値観で人は動くようになるのです。今までは人にどう思われるかという相対的な価値観できたのが、今は自分自身が生きてきてよかったと思えるような絶対的な価値観に変わってきていると思うんです。だから、街は楽しいかということは、この街で暮らして、この街で生きて、よかったと思える場面をどれだけ作れるかということではないかなと思います。21 世紀のそれが価値観であって、やはり私は、資本主義経済の限界まできてるんだと思うんです。無駄の限界です。中国でもどんどん自動車普及し、地球が 1% 温暖化すると、10% の穀物の生産が減ると科学者は言っています。我々は石油ショックを 30 年ほど前に経験しましたが、今は、石油より水が大切な時代になっているんです。水というものに高い意識が集まっているということは、思えば若い小さな子供たちに水というものの大切さ、地球は一つしかないという大切さを感じさせるためにもいい場所なんではないかなと思うわけです。

日常の暮らしの中で、ものに対する価値意識はどんどん低下していくんですね。自動車がほしい、このバックがほしい。そういうようなものを獲得しても、達成感は 30 年ほど前のようにないんです。われわれの 30 年前なら、自分たちがこの車ほしいんだというものが手に入ったら、ずっとその車を眺めて、触って、中に座っていたんですが、そういうような愛着が全くない人が今は多いんですね。この前も、私の友人の女性が、エルメスで 100 万円くらいのバックを買ったそうなのですがお店から帰って、家の棚に置いたままと言っていました。これが実際に起きているんです。そういうふうな物に対する価値観はどんどんどんどん変わってきていますから、『なぜ物が売れないんだろうか』っていうものを聞かれても、僕はつらいなあと思うんですよ。大阪に仕事に行きますと、必ずどのようにとしたら景気はよくなるんだろうって言われるんです。流通業の街なんですよ、大阪は。極端に言えばブローカーの街なんです。それがインターネットでどんどんものが購入できる。郊外に巨大な商業施設ができる。そしたら、流通業ではブローカー業の人がいらなくなってくるんです。だから新しい産業が大阪に登場するまでは、ずっと経済は悪いんじゃないんですかって答えています。



「阪神百貨店 6 階リラクシア / 2001」  
大阪の阪神百貨店さんと 25 年くらいお付き合いさせて

いただてるんです。リニューアルしていく中で、6Fの600坪くらいのショールームの跡を計画することになりました。私はたまたま沼津に小さな家がありまして、スーパーマーケットが家の近所にできました。そのスーパーの横に足つぼマッサージ屋さんができるんです、4年位前。はじめは何も予約をとらずに行ってもできたんです。3ヶ月目あたりから予約を取ってくださいって言われて。畑の真ん中のショッピングセンターでも足つぼマッサージ屋がはやっているんです。だったら、大阪の梅田のど真ん中で、年間2500万もの人がおいでになるような百貨店だったら、全身のマッサージ、脚つぼのマッサージ、歯のクリニック、そういうような美容と健康のためのサービスと情報を提供する600坪なら十分可能性はあると思いました。これすごく評判がいいです。ここではものは売ってないんですね。だからこういうの一つ見ても、やっぱり百貨店でさえ、物を売るのが非常につらくなっているんです。これは皆様も同じだと思うんですね。だとしたら、中心市街地にある商店街も、やはり今までのように物を並べても、売れないのであれば、もっと世の中の人々が望んでいる新しいものがたくさんあるんじゃないかなと私は思います。



「海老名ピナウォーク / 2002」

次に、2002年のピナウォーク。海老名に約15000坪ほどの巨大な敷地を小田急電鉄さんがお持ちだったんですね。今駐車場になっているところの手前が市の公園だったんです。小田急さんからショッピングモールを作りたいという相談でした。人口15万人の街で、駅から500mほど歩くと蛙が鳴いているんです。小田急さんと海老名市さんとで20年の懸案事項だったんです。そこで私たちが提案しましたものは、2800坪の市の公園と商業施設が一体化したもので、中心はこの真ん中の市の2800坪の公園です。その周りにお店を配置し、ここには丸井さんも入っているんですが、映画館もあるという提案をしたんです。ほんとにおっかなびっくりで、こんなところにお客様がおいでになるのかなと思っていました。18万人くらい一日乗降客がおられる相鉄と小田急とJRが入っている駅なんですけど、オープンしましたら一年間くらい土日は一日約15万人から16万人くらい人がおいでになるんですね。今は平均して土日は13万人くらいなんです。平日も平均して7万人くらいおいでになるんです。小田急さんの社長さんが、売り上げが年間22億円上がったと。これはもう最高であると言

われましてね。施設も非常に活気があるんです。この周辺の人たちはこういうものを望んでいたんだろうなあと。これも、この2800坪の公園に子供を水遊びさせているのはただなんですね。これだけ成熟化して経済もスローダウンしている時代ですから、お金なしでも楽しめるのは重要だというふうに思っています。



「なんばカーニバルモール / 2003」

次に、2003年のカーニバルモール。これは大阪球場の跡に、右側に大きな商業施設ができて、高架下の間に道がありまして、その道の計画を南海電鉄さんに依頼されました。その中に稲荷神社をつくらせてもらったんです。物を消費するだけではなくて1回手を合わせようよというんで、そのカーニバルモールの中に稲荷神社をつくらせてもらったんです。これもなかなか評判がよくて。手を合わせるといってお子さんが少なかったものですから。ここにも、神社たくさんありますが、行政の方は色々な関係上なかなか難しいと思いますけど、お墓とかお寺とか神社というものを整備すると、それだけでも街というものは活気付くというか、そこから祭りが始まったりするわけですからいいんじゃないかと思えます。小山市を歩いてみて思いましたのは、何でこんなに木が少ないのか、東京のほうが木が多いと思います。木を多くすると、落ち葉が落ちるといってもいいと思うんですが、それを気にしていたら街はよくなりませんかと思うんです。だから、もっと緑豊かな街にしないと、東京からこっちに引っ越してくる意味がないんじゃないかと思うんです。そういった意味で、私はもっと街のなかに緑がほしいなあと思えます。そして雄大な川がある訳ですから、あの川で四季を感じられるということが大事だと思うんです。日本の国の魅力の一つは春夏秋冬があるってことなんです。もっと活用してもらいたいと思うんですよ。私も何十年仕事をしてきて、この頃つくづく、フランス料理食べるより、公園のど真ん中、もしくは川原のところでおにぎり食べる方がいいなあって思うんです。クリスマスなんか来るとなんかうっとうしい。なんか私には場違いだなあと思うんです。やっぱりお正月はいいなと思うんです。だからバレンタインよりひなまつりの方がいいし、ワインよりも焼酎の方が売れたりもしてますし、それは日本酒も同じだと思うんです。だからフランス料理よりも世界に名高い日本料理があるんだからっていうふうに考えていきますと、日本が歴史的に育ててきた衣・食・住というのは優れたものがあると思うんです。小山市を東京の

人たちがうらやましがって、そこで住もうと思うことがあるならば、さらに日本の伝統や文化を大切にしていこうではないのかなと思います。新しい時代には新しい必需品があると私は考えております。

もう一つ付け加えさせていただくと、三種の神器の次に五つの神器という価値観があると思います。もっと楽しくていう「娯楽」、もっと美しくという「美しい街」をつくる仕事、もっと「健康」でありたいという健康のためのなにか。そして、もっと「学び」たいという人は非常に多いんですね。そしてもっと人と「交流」をしたいというような五つの神器っていうのがあると思うんですね。沼津にビュッフェ美術館とバンジーの彫刻美術館がある街があるんですね。約30万坪くらいの街なんですけど、そこはほんとに美しい街をつくっていて、人がたくさん訪れています。六本木ヒルズと、その沼津の田舎に同じブランドのレストランがあるのですが、沼津の方が売上げが倍あるんです。みんな美しいことを望んでいるのも確かだと思うんです。だからぜひ、街の中に木いっぱい植えてほしいなあと思います。この前も徳島に行ってびっくりしたんですが、知事に案内されたところに小さな木がずっと街路樹としてあるんです。3mくらいの。『なんであんなに木が低いんですか？』って聞いたら、『いや～、そうなんだよ。この前全部切ったんだよ』っておっしゃるんです。並木道の木を全部切ったんだそうです。それは葉っぱが飛ぶとかそういうような理由だったんです。

熊本にも時々行くんですが、熊本空港から市内に行くまでに、ずっと並木道があるんです。これは素晴らしい並木道なんですが、細川さんが知事のときに、空港から町の中まで街路樹を植えたそうです。森の都なのだから森で迎えなければいけないと言うことで、植えられた参考例です。



## - 会場との意見交換会 -

### 田中彩さん（桑中学校2年生・会場からの意見）

私は、小山駅西口から思川と祇園城通り周辺地区を歩いたときいつも思うことは、暗いということです。お店が開いていても、ごちゃごちゃしていたり、客が入っていません。また、昼真っから閉まっているお店も多いです。きっと色々な事情で閉まっているんだろうと思いますが、小山駅の玄関口でありながらそのままでは寂しいで

す。ですから、私としては今後その場所を明るく賑わいのある場所にするためには、まず営業していないお店を他のお店に入れ替えて営業する必要があると思いますが、どう思われましたか、お聞きします。

### 北山孝雄氏（講演者）

営業をしておられないお店というのは、先程もあなたがおっしゃるようにいろんな事情があると思うんですね。その営業していないお店を何かものをお店にしようというところに、無理があるんですね。だから、ここの郊外にもやはり大きなスーパー系の大商業施設があると思うんです。そこいけば、品揃えもたくさんありますし、値段も安いし、そして乳母車を押してよそ見をしても自動車にはねられるようなこともないような場所があると思うんですね。そちらには負けるんです。ところが駅前ということになれば、先程も言いましたように、我々高齢者もそうですし中高年者も若い人もそうですけど、学びたい場所がほしいだろうし、もっと人と人が交わるような場所がほしいし、駅前だったらそう保育園もほしいし。今までとは違ったことをやっていかなければいけないなあというふうに思うんですが、大体そういうようなシャッターになっている商店街の人はまだまだ覚悟がありません。よく地方に行きますと、西麻布と同じくらいの家賃がしたりするんですね。だったら、本当に元気にしたいというのであれば、いろんな人にいっぺん思い切った賃料、まあ無料ででもいいし売上げ歩合にして、若い人に貸してみたらどうかと思うんです。それが高齢者のボランティアの人に貸すっていうのも僕はいいなあと思うんです。私の会社に15から30歳くらいの人々が来ます。いろんな大学生・高校生も来ます。若いベンチャーの人も来るんですね。ベンチャーの人たちは私たちの考えとは全く違うような考えを持っていて、時代を吸収する知恵を教えてもらうのにもいいんです。そういう人たちの話を聞いていると、やっぱりファッションでも自分たちの街で新しいファッション、そしてアクセサリーその他の雑貨自分たちが作って自分たちが売りたいって人がすごく多いです。そういう人たちが入居して、そして賑わいを出していく。それがよその街にないものでなくてはいいかなと思うんですね。小さな店でもいいと思うんですよ。私は、一軒の小さなコーヒーショップからでも街は出来て来るんだと思うんです。一軒の小さなジーンズショップからでも、つながって隣がカフェになってその隣がアクセサリー屋さんになってっていうふうになっていきます。だから、小さな、そして学校があつたり様々なものがあるといいなあというふうに思いますし、突然お店の横が住宅になっててもいいいんですね。人が住んでいないとだめなんだと思いますから、駅前に住居があつても全然おかしくないんじゃないかなと思います。

洋服屋さんを開くとしたらどうなんですか？あなたが作ってあなたが売るとかね、あなたの友達が作ってあなたが売るとかというようなものでないと、やっぱり大きなお店には負けるんですね。だったら、そこでしかないものを買ってほしいね。じゃあ、そこでしかないものを例えば10坪

のお店で売ってると。その横が、自分たちのサロンになっている。だからそれをつくる洋服を作る、アクセサリーを作るアトリエになっている。その横で、今度はそういうようなものを習いたい人に教えてる学校があると。そういう風につながっていくといいなと思うんですね。単に洋服を売っているというんじゃないし、服もつくってると、横で。そしてつくることも教えてると。人がその洋服を作るのに参加している人が集まってサロンになっている。というような考え方がいいかなと思います。

昔はね、二階で作って下で売ってたとか靴なんて結構多いんです。子供が帰ってきてランドセルもって二階に上がって、下ではお父さん働いてる。やっぱりお父さんが働いてる姿が見れたんですね。今はみんな会社に行ってる訳ですよ。なんか知らないけどお金持って帰ってくるなあと。ありがたいもなくなったんですね。だから、やっぱり親が働いてる姿を見るっていうことも、またありがたいの一つになるんでね、お店でものを売るだけじゃなしに、いろんなことをその店がやっていると、インターネットで買ったり、百貨店で買ったり、スーパーで買ったりする人たちよりも、お客さんがそこに行ってみようというふうになるんじゃないかなと思います。

#### 桜井隆行さん（デザインコンペ受賞者・会場からの意見）

小山高専の桜井と申します。よろしくお願ひ致します。今回の私の案に関してなんですけど、実際この思川の土手の散歩道が、道路で切れているんです。それを解決するために歩道橋を考えて、その歩道橋が同時に中心市街地へのゲートみたくなるようなものがないかなというふうな考えでやってみたものなんです。実際パンフレットとかメディアで逆の西側の白鷗大学がある方の景色がすごいおされているんですけど、逆にこの中心市街地側の都市の景観が、何かアクションを起こせないかなという感じでやってみました。結構違和感ある景観に異物を入れるっていうことは非常に勇気のあることで、自分のデザイン力の不足ってのもあるんですけど、自問自答の中で入賞になったんで、何かご意見いただけたらと思います。

#### 北山孝雄氏（講演者）

先程、廊下で見させてもらったんですが、前にあるゲートが、私は反対ですね。なぜ反対かと言うと、そこから街が違って見えるんです。街を分離するのではないかなと思うんです。だからそうではなくて、ごく自然に川と街が一体化するとき大きなシンボルがあると、そのシンボルによって街と川が分離されないかなというふうに思います。それと、堤防に立ったとき日光連山の方ずっと見たときにそのモニュメントが目に入ってしまう。だから、そのモニュメントが目に入らなければ、大きな桜の木が目に入ってくれた方がいいかなと思います。私はゴルフがすごく好きですが、ゴルフ場行くのは非常に少ないんです。年間10回くらい。毎週暇があれば土日は多摩川の練習場に行くんです。それは多摩川の堤防内にあるんです。河川敷にある

のですから、230ヤードくらいまでずっとネットがないんですね。雨の日ではできないんです。明日雨降らなければいいなあと常々祈りながら寝るときもあるんです。大体私ぐらいの年の人が30人から40人くらい集まるんです。1番打席から10番打席くらいまでは大体友達かサロンのに使っているんですね。そこには暖房機がないものから、ほんとに薪をくべて、浮浪者があたってみたいみたいな感じなんですけど。この前脳梗塞になられた長島さんなんかもそこがすきでおいでになられてたんです。だから、もっと自然と関わりあいたいっていう願ひってすごい強いんです。だから、この川っていうのはこの街の大変な資産だと思ってるんですね。国土交通省の人に私たちの本や記事を通じて毎回提案するのは、トイレや化粧室を作ってくれないのと思うんです。堤防の一番上に、先ほど案にもありましたけどレストランくらいほしいことです。男性は、なんとか簡易のトイレで済ませるんですけど、女性は『あそこはトイレがないから行かない』と言って来ないんです。だからやっぱりもっと家族連れで、(水かさが増えて、氾濫しそうなになったら大変なことですけど、それは20年に1回のことですから)もっとこの河川を有効に利用して、そして、災害時にはそれがどういうふうにもつかというのを計画してもらいたいですね。ほんとに広い豊かな公園なんですよ。豊かな公園を無駄にしていると思うんですよ。そういうような意味で、もっと豊かな公園を有効利用していただくと、ここでスカイスポーツやっているんならじゃあ行こうかというようになります。羽生に2回ほどグライダーに乗りに行ってるんですけど、東京の人はそれで行くんです。香港の有名な金持ちの人たちも、香港ではグライダーに乗れるような場所ないから羽生に来られるのです。だから、よその街でできない、できるだけお金もかけないでできるような、そして国土交通省と掛け合ってもらって、それこそ街再生の一環としてこういうものを作りたいという積極的な提案で利用されたいんじゃないかなと思うんです。だから、素晴らしい映画見るよりほんとに最高の夕日見るほうがいいと思うわけですよ。徳島なんか行っているんなら新しい建物見せられるより、帰りに虹を見たほうがずっと印象的だったんです。そういう意味で、使える自然はただですから、どんどん利用されたいんじゃないかなと思います。

#### 桜井隆行さん

先生が今日散策されて一番印象に残ったものは？

#### 北山孝雄氏

一番印象に残ったマイナスの方は、自動車しか渡れない橋、これ最低だと思うんです。これどうにかしてですね、離れたところでもいいですから、人道橋、人だけが渡れる橋を架けてもらいたいかなと思います。ほんとにいいなと思うところは、やはり日光連山を望むところでしたね。もっと嫌だなと思ったところは、向こう側になんか商業がずっとあって、その商業を車で移動していて車が超満員になっていてさびしいなと思いましたけど。



### 諏訪ちひろさん（小山市内在住・会場からの意見）

先生いいお話ありがとうございました。私は小山市に生まれ育ちまして、よその土地にも何年か住んでいましたけれど、小山を思い出すとき、私のふるさととは思川とともに思い出されるもので、今、「思川に思いをはせる会」というのにも参加させていただいております。この会は、思川をもっと有効に市民の憩いの場として、また小山のアイデンティティとして育てていこう、育んでいこうという主旨があるんですけど、今現在ですね、思川・・・イベントをやる時には人が集まるんですが、それ以外のときってというのは犬の散歩くらいで人が通るくらいで、市民と一体化しているといった様子がないんですね。先生先ほど観覧橋渡られて歩くところがないとおっしゃられましたけど、歩道付いているんですけど、歩いてないんですよ。歩道が付いてないと勘違いするくらい人が歩いてないんですよ。

### 北山孝雄氏（講演者）

私が歩いたのは観覧橋じゃなくて車だけのやつです。

### 諏訪ちひろさん

それは思川大橋の方ですね。あれはほんとに自動車専用の50号線の方なので、人が歩かないふうになってます。また、どんな風に歩道作ってもほんとに人が歩いてなくて、小山駅から思川までこんなに素晴らしい自然公園の場所まで商店街が続いて公園があるというそういう立地条件であるにもかかわらず、そういうふうな雰囲気もないし、また、一体化してないんですね。商店街と思川も連動してないし。それから市民と思いがわかっていうのも、どちらかというと日頃のなじみとかじゃなくて大きな花火大会だとか、イベントがあるときだけの思川っていうイメージになりつつあるんですね。わたしが小さい頃は、思川で遊ぶのは当たり前前のことでしたし、思川っていうのは子供たちの遊び場だったんです。それが現在失われてきたって事は、何か先ほど先生のお話にもありましたように時代に移り変わりと共に人の考えも変わったのか。それとも小山の方でなにか思川に対してすべきことをしなかったがためにこうなったのか。市民がすべきことを怠っちゃったのかという不安

があるんですけど、これからもっと思川を市民の憩いの場として、また小山のシンボルとして活かしていくためには、こんなこともいいんじゃないかという先生のアイデアがありましたらぜひ教えてください。

### 北山孝雄氏

思川もそうなんですけど、私は東京の砧公園の周辺に住んでいるんです。子供を連れて公園に行くと、してはいけない注意事項が書いてあるんです。キャッチボールをやるな、ゴルフをやるな、ゴルフはわかるけど、子供のキャッチボールもするな、木登りもするな、何もするな、じゃあ何するのって具合になってるんです。それと片方で、子供たちの遊びが、体を使って仲間と遊ぶっていうのがどんどん少なくなって、自分ひとりでコンピュータを相手に遊んでっていうのが非常に多くなったんです。だから私たちの子供のときのように、私たちは大阪だったんですけど、淀川行って急流の50mくらいを行って帰ってこれるかっていう度胸試しを試してた時代なんです。すごくそういう意味では川に親しみがあつたし、今も愛着があるんです。子供たちはやっぱり思川を、川に行くのを親たちがみんな禁じてるってのがあるんですね。どっかでやっぱり川とどうやって親しませていくのかっていうのも大事なんじゃないかなと思います。リスクがあるもんですから何もさせないんですね。祭りの時には人が集まる、当然集まるんですね。だけど祭りもすごく重要だと思うんですよ。世界でもそうなんですけど、祭りが一つのコミュニティを作るんだと思うんですよ。大阪のだんじり祭りなんかを見ていて、それすごくヒントになりました。17歳から30歳くらいまでの方しかだんじりを担げないんですよ。体力がいるからなんですね。で、だんじりが好きな長老がいっぱいいますね。80歳くらいのだんじりの長みたいなのがいて、その人が所得があつたりすると自分の家を貸すんですね。一年間練習をするんですね。70、50、40、18みたいな感じで集まって練習をするんですね。だから、これは駅から降りてきたときどこの子かわかるっていうんですよ。すごいいいコミュニティが形成されているんです。だから、岸和田の青年の人たちはたとえば京都で働いていてもだんじりのときは帰るっていう約束を書いてもらうんですね。それくらい街の祭りでコミュニティができていっているんですね。今そういうコミュニティがあることによって、たとえば小山市なら小山市の価値であるという時代になろうとしていますから、これを考えられることではないかなと思うんですね。はじめは、すごいささやかなもんだと思うんですね。北海道で大きな祭りやっていますよね、よさこいソーランっていうあれも14~5年前は札幌の大学生が高知に行って教えてもらい、今では高知の自家より大きいんですよ。私の友人がよさこい祭りの副理事やって、4年間くらい10人くらい連れて教えてたんですね。で、あんな大きな祭りになった。祭りでもない街の人が集まれない時代なんですよ。そういう意味で、何か川を利用した祭りや、そして熊本では植木市っていうのを川でやっているんですよ。あれもいいですし、羽生の市長さんにこの前お会いしたら盆栽市っ

ていうのをやってらっしゃるそうなんです。ああいうような、自然に類するここでしかないものが大事なんだろうと思います。はじめはなかなか2~3年は苦労されると思うんですけど、やっぱり汗かかないでお金さえ出せばなんでもできた時代は終わったんだろうと僕は思っているんです。そういう意味で、みんなで隣の人、またその隣の人と手を合わせて汗をかいて知恵を出して工夫をして街をよくしていくしかないと思うんです。街づくりをお手伝いしていると、『お前の考えには賛成やけど、俺はあの商店会長が嫌い、だから反対』って言う人がいっぱい出てきたりして、結構ややこしいんですけど。まず、ビジョンがないとまちづくりなんて始まらないですから、まずビジョンをつくってもらいたいなあと思います。そして、日常、街の人が常に言ってるのがすごい大事なんですね。街の人はごく自然に日常的に行けるような構造になってないといけないんじゃないかなと思います。野球一つとっても東京ドームで見る野球と、甲子園球場で見る野球っていうのは、こんなに違うもんかなって思うくらい甲子園球場の星空のナイターは最高なんです。私が思うに100倍くらい違うと思います。

### 諏訪ちひろさん

ありがとうございます。今、小山市で思川を使ったイベントを色々増やしているんですけど、それは先生のお考えで言えば間違っていないということですね。

### 北山孝雄氏

全然間違っていないし、それを小さい子から参加させた方がいいと思います。小学校一年生みたいな子にも、商売させてね、やった方がええんちゃうかな。だってね、たとえば濃縮ジュースとかを300円で仕入れて10杯売ったら3000円になると2700円儲かるぞと。1杯も売れなかったら300円損するぞというのを色々体験させるといいなと思うんです。私の家のそばにインタナショナルスクールがあるんですけど、そこは小学生から商売をさせているんですね。『おかあさんこれいいかな』って行って家のものをもってきて一個5円とかいって売ってるんですね。学校では理屈ばかり教えて、実体験を教えない場合が多いですから、ぜひ祭りをどんどんやってほしいなと思います。

### 諏訪ちひろさん

先生の言葉に勇気をえて、これからもがんばっていきたいと思います。

### 伊澤幹夫さん（小山市内在住・会場からの意見）

公務員の伊澤幹夫です。私小山で育って、仕事の都合上今帰ってきたのが約20年ほど前にまた小山に帰ってまいりました。それで、小山で生まれ育った者がですね、帰って来たくるようになるにはどうしたらいいの？私これ先生のお話を聞く前にですねこの質問をしたんですね、ちょっと今先生のお話の中に回答が私はあったのかなあと思

って。結局先生にどうすればいいのかって聞くよりも、私たちが何をしたいのかと。それを実現するために先生に、じゃあこれを実現するためにはどうすればいいのかということをお伺いするのが、これが小山市をよくする話になるのかなと、ちょっと私この質問を書いてですね、反省をしております。

私帰って来たときですね、20年位前だったからですね、昔と変わらなかったんですね。変わらないということにものすごい安心感があって、ああ良かったなあって、なんかこうどんどん変わっていくことがいいことなのかなって、気がします。

先生のお話の中にでてきた東京の例だとかはほとんど人が変わっていく街だと思うんです。そうすると、小山はそういう街なのかな？と。ずっとそこに生まれ育った人がそこに定着してですね、いく街なんじゃないかなと思ってます。やっぱり、子供がたくさんいる街っていうのは活気のある街なんです。3人以上の子供がいる家族が住みやすいとかですね、老人が住みやすい。そういう風な街にするにはどうすればいいの。政策的なもの、それから設備的なものっていうのがあると思うんですが、それから最後に、先生小山に今日来られて、過去に先生が色々なことを仕事上で手がけてきたことで、小山に似ているような街があったなと、なにかそういう例があれば、教えて頂ければ非常にありがたいなあと思います。

### 北山孝雄氏（講演者）

先ほどちょっと言い忘れたんですが、農業をずっと営んでおられるところを車でまわらせてもらったんですけど、きっとあれは5月から6月美しいんだろうなあって思ったんですね。川というんな穀物の生産しておられる場所っていうのは美しいなあと思いましたんで、彼女に何かいいところありましたかって聞かれたとき、ちょっと忘れていました。

大体小山に限らず新幹線のできたところはだいたいこんな駅になってますから、個性がないんですね。だから宇都宮で降りたのか小山で降りたのか本当にわからないくらい同じなんです。これえらいつらいことだと思いますけど。

そういう意味では、これは非常に悪いイメージです。駅降りてから川まで来るとちょっと印象変わったんです。だから駅のところはなかなか直すことはできませんから、権利関係も色々あると思いますので、だからもう一度川のところに重点を置いてやっていかれたらいいんじゃないかなと思います。

当然小さい子供が山のようにおられる街っていうのは元気なんです。これ日本の戦後でピラミッド型になっていた訳ですから、今逆ピラミッドになっているんですね。お年寄りばかりおられる様になっていますから、若い人の声を聞くっていうのは元気になりますし。じゃあ若い人たちを(子供たちを)育てやすい環境っていうのをつくる必要があると思うんですね。育てやすい環境の中に、一つは子供を野放しにしている、誘拐されない・車にはねられない街っていうのがあると僕はあると思うんです。今見て

たら、本当に自動車中心になっていて子供の手をはなしたらすくひかれそうな感じがするんですよね。答えになったかわかりませんが。

### 金森定敏さん（小山市内在住・会場からの意見）

今日は、小山市として飽きない夢のある充実した会を催していただいて大変ありがとうございました。近来、小山市にないような会になったと思います。

今日のお話を聞きまして、先生が大変幅広く色々な場所を歩いてらっしゃって、色々経験をふまわれていると思います。ぜひ一つお伺いしたいなと思うことがございます。

今日の会は歴史と水と緑の景観を活かしたまちづくりという感じでだいぶ進んできてまいったと思いますが、歴史とか建物とか道とか自然とか、それらが人間と一体となったまちづくりというのは、どなたも考えていることだと思いますけど、私最近考えるのは、現在の小山市の家屋構造というのは、鍵をかけまして、呼び鈴があって、『ごめんください』といって呼び鈴を押して『どなたですか』でドアが開けられる、という街になっておられます。そして、小山市の人口を考えてみますと、あと10年も経ちますと近隣の二つの街の全部の人口を併せたものと同じくらいの年寄りの人口の高いの街になってしまいます。そこで問題は、確かに自然の景観を活かしたまちづくりは大事なことなんですけど、人の心の鍵を開けているような閉ざした街、やがて年寄りがだんだんそこに少なくなっているような街になってしまう、そういう街は小山市として似つかわしくないような気がするんです。

そこで、人が心を閉ざしているものが開くような、そしてより住みよいような街、そういった街をもつてくるとすれば、どのようなことがここで行われているか、そういったものがあれば、教えてほしいと思うのですが、よろしくをお願いします。

### 北山孝雄（講演者）

高齢者が多いというのは日本全国同じなんです。その高齢者の方というのは非常に教養があったり、文化的な能力があったり、手に職があったりするんです。これを外に出してもらって、若い人たちに教える。そして若い人たちが、先ほど言いましたようなだんじり祭りのような若い人と年寄りの方が関わりあえる。そしてまた、75歳ぐらいまではまだ十分働けるわけですから、そういう人たちが毎日働くわけではなくて週に3日くらい働けるような産業をつくっていかないと、いけないんだと思うんです。

大阪の船場というところで子供のときによくアルバイトをしたことがあるんですが、大きく事務所に書いてあるんですね。それは『商いの利はもとにあり』と。要するにいいものを安く買って高く売れば儲かるんだぞということが書いてありまして。もう一つは『商いというものは笑いをもって栄える』って書いてあるんですね。笑わないと人は寄ってこないよってことなんです。なんでもいかに苦しいことがあっても笑おうというのが、大阪の商売人

なんです。

だから、小山の人も隣の人と話をしてなんかいつでも笑っているというスローガンがあると、『ほんまかいな』って思っているうちに、怒っている人のところには人は来ませんから、笑っていると人は来るんだなというようなことになって、笑う街になったりするかもしれません。そのようになんかスローガンが一つ必要なんじゃないかなと思うことと、やはり高齢者の人が若い人に自分たちの知恵や工夫を伝授していく、というようなことが大事かなと思いますし、東京の人がうらやむような、たとえば家もしくは露天風呂みたいな、なんか一つだけでも話題になりそうな気がします。そのときに、周りの人があそこいってみようというようなものがが必要です。今は川はあるけどそれをうまく利用していないなと思います。

確かに小山市には思川という財産がありますから、是非それを活かして今後まちづくりをしていただけたらと思います。



「日光連山と観晃橋と思川」

2005年(平成17年)1月23日(日曜日)



「小山市はもっと緑豊かな街にすべきだ」と語る北山さん

歩いて楽しめる街に

小山市でまちづくりシンポジウム

【小山】市長と個性豊かなまちづくりを考えるシンポジウム(市主催)が二十三日、市文化センター小ホールで開かれた。

約三百五十人が参加。全国の商業施設などを手掛ける東京都の北山龍造研究所代表北山孝雄氏(たかむね)による基調講演が行われ、厚川を活用した街づくりや中心市街地の活性化について話された。北山氏は「いま、街

は「のしかか」と題して講演。「人が集う場所や、人が住む、生活街、をいかに生かすか」と提案し、「この街の個性は何かを高めることで街は楽しくなる」と述べた。

講演前に披露した市内各所で「厚川」という素晴らしい個性がある」と強調。「今の時代は車で移動するのではなく、徒歩で歩ける街が必要とされており、厚川に歩行者の橋を造ってほしいのでは」と指摘した。

小山市で街づくりシンポジウム  
基調講演の北山氏  
「個性を生かして」



小山市立文化センターで22日、「小山のまちづくりシンポジウム」があった。北山龍造研究所の北山孝雄氏が「いま、街は個性を生かして」と題して基調講演し、小山市のまちづくりに率直な、時には厳しいアドバイスをした。

北山氏は、「渋谷ON AIR」「亀戸サントリート」など数々の商業施設や市街地活性化事業を手がけてきた。講演で北山氏は「人とふれあう場所がなくなっている。昔の公園のこたつのように、人と集うチャンスを増やすことがもっとも大事だ」と強調した。「渋谷ON AIR」「亀戸サントリート」では高層ビルの建設計画をなくし、低層の商業施設に人やペットだけが歩ける道路を確保したことなどのエピソードを紹介した。

2005年(平成17年)1月23日(日曜日)

「小山で印象を持った所は」などの質問に対し、「厚川をさっさと直した」「大きな商業施設がバラバラに点在しているところにはビジネスとして古い」「市街地に木が少なく、冬も、厚川の土手から日光連山が望めるのはいいな」と語った。他の街にはない、個性を生かしたものを「生かす」とエールを送った。